



感情を出さない

児童期後半～思春期（10～13歳）



「ホラホラ」と声をかけても、どこかうとうしそう。



父親が注意しても、知らん顔。

100ページでも述べましたが、この時期になると児童期前半よりもさらに、親に話しても仕方がない、面倒くさいなど、複雑なことを考えるようになります。一つ考えられるのは、人間関係のプライオリティー（優先順位）が、親から友だちに切り替わっていつているということ。これは健全な成長です。親はさみしいかもしれませんが、だからといって親を捨てるわけではなくて、結局大

事なのは親だと思っている側面も残っています。

親はもう、友だちの代わりににはならなくなってきているのです。わが子が親以外に信頼できる友人（こうした存在を「シグニフィカント・アザーズ（Significant Others）」と言い、人格形成に重要な意味を持つ人物を指します）に出逢えたのだと、その成長を喜んで、これまでの自分の子育てに拍手を送ってください。

ただし、心配なケースもあります。一つは、「イヤな気持ちを吐き出してはダメ」と思い込んでいる場合です。まじめなタイプの子に多く、無理をしても笑っていたほうがいいと思いつ込んでいて、それがおかしな処世術になってしまっていることがあります。107ページでも説明したとおり、「ネガティブな感情は悪いものではない」というメッセージを、日頃から伝えていきましょう。

もう一つ考えられるのは、家の中の諍いがパターン化している場合です。たとえば、きょうだいで言い争いになって、そこにお父さんがやってきて「やめろ！」と言ったらもつとひどいケンカになって……、というように、気がついたらいつも同じパターンの諍いになっていることはありませんか？

これを繰り返すことで、どうせ同じパターンに行き着くなら、この家族では何をやってもムダ、となってしまうているかもしれませぬ。こうなると、「もうこの家族の輪から外れます」

児童期後半～思春期（10～13歳）